



◆ ◆ ◆ ◆ ◆

●勤務医に関する話題や投稿などで構成するコーナーです。勤務医生活の雑感、あるいは意見をこの欄にお寄せください。
●投稿要領…700字程度、名古屋市昭和区妙見町19-2、愛知県保険医協会「勤務医コーナー」係まで。薄謝進呈致します。

性暴力被害児と

向き合って

千種区 古橋功一

私が日々出会う子どもたちが多くは、近年児童精神科が主な診療対象としている神経発達症(発達障害)ではなく、被虐待児など、トラウマ・ストレス関連疾患を抱えている。中でも近年増加傾向にあるのが、性暴力被害児である。二〇二〇年度では外来初診の四割強、入院の過半数と、おそらく全国でも有数の割合と

思われる。性的虐待では、父などから年余に渡る被害を受け、始まりは小学生からという例が多い。当初は被害の意味を理解できず、理解できるようにも誰にも相談できず、辛い気持ちを抱えながら、偶然めぐり合わせた機会に被害を開示し、保護され、医療が必要と判断された子が私の目の前に

現れる。また、家庭外でも、近い大人や先輩・友人からの被害が多く、開示が遅れることは同様だが、デートレイプなど、被害の認識がないこともあり、「あなたがされたことはレイプ、犯罪」「あなたは決して悪くない、被害者なんだよ」との私からの指摘に、蓋をしてきた感情が溢れ出し涙が止まらない。またアルコールなど物質使用や、リストカットなどの自傷行為、「性的逸脱(いわゆる援助交際など)」を認め、「問題児」扱いされている例も珍しくないが、これらはトラウマ症状を背景とした二

次の問題であって、注意や指導では改善は見込まず、原因となっているトラウマ症状を目標に専門的な治療を要する。
しかし、長く被害を受けてきた子は、大人に対する不信感が強く、自己否定的、感情コントロールが困難で、治療がスムーズに進まないことも多く、医療者に激しい感情をぶつけることは日常茶飯事である。子どもに寄り添いながら、治療に向き合えるように粘り強く関わっていくことが必要である。また、児童相談所等の子ども関係機関との連携や、警察・検察との連携、弁護士、民事訴訟への協力など、病院外の役割も盛りだくさんであるが、目の前の子どもたちの真の回復には、これも主治医の大切な仕事との思いで日々取り組んでいる。